

张如意 编著

にほんぶんがくし  
日本文学史



外语教学与研究出版社



にほんぶんがくし  
日本文学史

张如意 编著



外语教学与研究出版社 北京



## 图书在版编目(CIP)数据

日本文学史 / 张如意编著. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2013.12

ISBN 978-7-5135-3967-8

I. ①日… II. ①张… III. ①日语-阅读教学-高等学校-教材②日本文学-文学史 IV. ①H369.4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第006719号

出版人 蔡剑峰  
责任编辑 蓝佳 王晓静  
封面设计 吕茜  
出版发行 外语教学与研究出版社  
社址 北京市西三环北路19号(100089)  
网址 <http://www.fltrp.com>  
印刷 北京京科印刷有限公司  
开本 850×1168 1/32  
印张 11  
版次 2014年1月第1版 2014年1月第1次印刷  
书号 ISBN 978-7-5135-3967-8  
定价 32.00元

购书咨询: (010)88819929 电子邮箱: [club@fltrp.com](mailto:club@fltrp.com)  
如有印刷、装订质量问题, 请与出版社联系  
联系电话: (010)61207896 电子邮箱: [zhijian@fltrp.com](mailto:zhijian@fltrp.com)  
制售盗版必究 举报查实奖励  
版权保护举报电话: (010)88817519  
物料号: 239670001

私は、2010年より、2013年までの3年間、河北大学で日本近現代文学及び日本古典文学の授業をさせていただいた。その時に張如意先生は、日本文学史の授業を担当され、旧版張如意編『日本文学史』（河北大学出版社）をテキストとして使っておられた。私は書店でこの本を買って求め、私の授業でも大変参考にし、活用させていただいた。

今度の新版は、旧版の主要部分に私が目を通し、気付いたことを指摘したことを張如意先生が受け入れてくださり、修正されたものである。例えば、私は、志賀直哉を専門にしているが、旧版の「出身は宮城県」となっていたのを、新版では「宮城県で生まれ、東京で育つ」とし、代表作品の「城の崎にて」のルビが「しろのさき」となっていたのを、「きのさき」と改めた。などである。他にも旧版では「太宰治はこんなに長生きしなかった」「谷崎潤一郎はもっと長生きした」と私が感じた部分もあったので、新版では生没年を調べ直し、より正確なものにした。などなど。この本が旧版より、より正確で、利用しやすくなったことを喜ぶたい。

『日本文学史』は大変良い本で、日本語学習者、特に日本語、日本文化を専攻にした学部生に役に立ち、有益だと思う。このたび、外研社によって出版されるということで大いに期待している。

深堀郁夫

本教材是日本文学史的入门教科书，在对2004年河北大学出版社版重新修订的基础上编写而成。

对于中国大学日语专业的学生来说，日本文学是必修科目之一。日本文学史是日本文学中不可或缺的一部分，文学史不但能帮助我们了解作品产生的时代背景和作者的情况，更重要的是可以让我们掌握文学发展的脉络和基本规律。不了解文学发展的历史，就不能很好地认识文学的现在和将来。正如我们为了了解现在和未来而学习历史一样，要想知道日本文学的现状和未来的发展趋势，就必须了解日本文学史。

本书由六章构成，在文学史的分期上基本遵循了上代、中古、中世、近世、近现代这一年代划分方式。但是，一般的日本历史和文学史书籍中很少会将近代和现代作明确的区分，这一方面反映了日本学术界对历史时期划分的审慎态度，同时也说明了日本近代和现代区分的难度。鉴于近现代文学史信息量的庞大以及阶段特征的明显区别，也为了便于广大学习者学习，本书以第二次世界大战日本投降为界，将1868年明治维新之后的历史时期分成了近代和现代。



各个章节中，在简单介绍该时期作品产生和发展的背景等文学概况的基础上，按照诗歌、小说等体裁进行分类，并对名家名作进行了重点介绍。为了帮助大家更加清晰地认识同一种文学形式的发展脉络，力争做到内容上的前后呼应。每章后附有少量练习题，可以帮助大家回顾主要内容。为了帮助学习者综合掌握本书的内容并照顾部分学生考研的需要，在附录中添加了综合模拟试题。综合模拟试题主要来源于各院校考研的真题，根据出题院校不同，分为中文试题和日文试题两类。

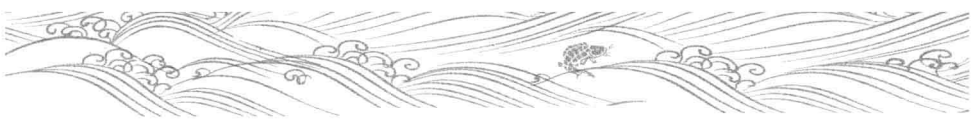
本书正文以日文编写，根据我国学生的阅读习惯，采用了横向排版，并在难读的汉字上标注了假名。为了在尊重日文记述习惯的同时照顾中国学生的学习习惯，在日本年号后面都附上了公历纪年。

虽然在编写过程中极为谨慎，但由于本人才疏学浅，且时间仓促，书中必定存在不少疏漏，敬请大家批评指正。在此也对在书籍编写和出版过程中给予大力支持的各位老师和同仁表示崇高的敬意和谢意。

编者 张如意

2013年5月

❁ <b>第一章</b> 上代の文学 .....	1
第一節 文学の概況 .....	2
一、時代と背景 .....	2
二、文学形態と文学理念 .....	3
第二節 日本文学の発生と成立 .....	5
一、口承文学から記載文学へ .....	5
二、祭りの文学 .....	12
第三節 詩歌 .....	15
一、上代歌謡と記紀歌謡 .....	15
二、『万葉集』の世界 .....	17
三、漢詩文 .....	22
❁ <b>第二章</b> 中古の文学 .....	27
第一節 中古文学の概況 .....	28
一、時代と背景 .....	28
二、唐風文化から国風文化へ .....	29
三、女流文学の隆盛 .....	29
四、物語の衰退 .....	30
第二節 詩歌 .....	31
一、漢詩文の流行と衰退 .....	31
二、和歌 .....	33
第三節 物語 .....	44



一、物語の誕生、発展と衰退	44
二、歴史物語	53
三、説話	55
第四節 日記と随筆	57
一、日記	57
二、随筆	62
第五節 芸能	65

**第三章 中世の文学** ..... 71

第一節 中世文学の概況	72
一、時代と背景	72
二、文学理念と文学形態	72
三、表現者、表現言語と享受層の変化	73
第二節 詩歌	75
一、和歌	75
二、連歌	81
三、歌謡と漢詩文	84
第三節 物語と説話	86
一、軍記物語	86
二、歴史物語と史論	90
三、擬古物語	91
四、御伽草子	92
五、説話と仏教説話集	93
第四節 随筆・日記・紀行	95
一、随筆	95
二、日記・紀行	99
三、法語とキリシタン文学	100



第五節 芸能 .....	101
一、能と観阿弥・世阿弥 .....	101
二、狂言と幸若舞 .....	103

## ◆ 第四章 近世の文学 ..... 107

第一節 近世文学の概況 .....	108
一、時代と背景 .....	108
二、文学の普及と文学理念 .....	109
三、上方文学と江戸文学 .....	109

第二節 詩歌 .....	111
一、俳諧 .....	111
二、狂歌と川柳 .....	118
三、和歌と国学 .....	121
四、漢学と漢詩文 .....	124

第三節 小説 .....	127
一、仮名草子と浮世草子 .....	127
二、読本 .....	131
三、洒落本・人情本・滑稽本 .....	134
四、草双紙 .....	136

第四節 劇文学 .....	138
一、浄瑠璃と近松門左衛門 .....	138
二、歌舞伎 .....	140

## ◆ 第五章 近代の文学 ..... 147

第一節 近代文学の概況 .....	148
一、時代と背景 .....	148
二、近代文学の誕生と発展 .....	149
三、近代文学の特質 .....	152

第二節 詩歌 .....	154
一、近代詩 .....	154
二、短歌 .....	167
三、俳句 .....	171
第三節 近代の小説と評論 .....	177
一、啓蒙期の文学 .....	177
二、写実主義 .....	179
三、擬古典主義 .....	182
四、浪漫主義 .....	184
五、悲惨小説・観念小説と社会小説 .....	188
六、近代評論の確立 .....	189
七、自然主義 .....	189
八、漱石と鷗外 .....	195
九、耽美派 .....	199
十、白樺派 .....	202
十一、新思潮派 .....	206
十二、大正各派の文学 .....	209
第四節 昭和の小説と評論 .....	213
一、プロレタリア文学 .....	213
二、新感覚派 .....	216
三、新興芸術派 .....	218
四、新心理主義 .....	220
五、文化統制下の文学 .....	222
第五節 劇文学 .....	228
一、演劇改良運動 .....	228
二、新劇運動 .....	230
三、大正期の演劇 .....	231
四、昭和期の演劇 .....	232

<b>第六章 現代の文学</b> .....	237
<b>第一節 現代文学の概況</b> .....	238
一、時代と背景 .....	238
二、現代文学の発展と特徴 .....	238
<b>第二節 詩歌</b> .....	240
一、戦後の詩 .....	240
二、戦後の短歌 .....	242
三、戦後の俳壇 .....	243
<b>第三節 現代の小説と評論</b> .....	245
一、戦後小説創作の出發 .....	245
二、戦後派文学 .....	249
三、第三の新人 .....	254
四、20世紀70年代ごろの文学 .....	256
五、20世紀70年代ごろの文学 .....	259
六、20世紀50年代以後の評論 .....	261
七、20世紀70年代後半以後の文学 .....	262
<b>第四節 戦後の劇文学</b> .....	264
<b>付録一 模擬試験問題集</b> .....	265
<b>付録二 日本文学史年表</b> .....	333

# 第一章



## 上代の文学





## 第一節

# 文学の概況

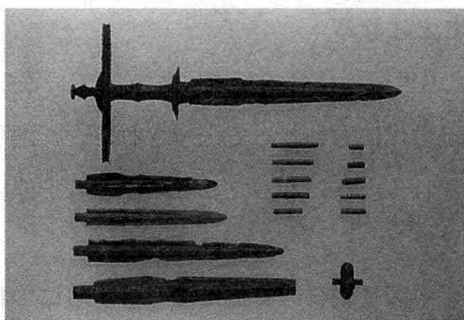


### 一、時代と背景

日本列島に住んでいた人々が、いつごろ言葉を用いるようになったのか、はっきりとはわからない。そして、文学と呼ぶことのできるものがいつ生まれてきたのかも、はっきりとはわからない。このような計りがたい太古の時代から奈良時代の終わりまでを、日本文学史では上代という。多くの小国家が分かれて存在していた1世紀ごろから、794年の平安京遷都までを上代という一説もある。

日本人の祖先がこの列島に住み着いてから数千年を経て、新石器時代を迎える。それは紀元前3世紀ごろまで続き、縄文文化時代と呼ばれる。そのころの人々は狩猟、漁労、採集の生活をしていて、縄文文化時代の晩期には、稲作の技術が徐々に広まって農耕社会を形成し、人々は集団生活をするようになった。紀元前3世紀ごろから2世紀ごろまでは弥生文化時代で、鉄製の農具の使用によって米の生産は飛躍的に高まった。このため定住生活がほぼ確立し、部族中心の小国家が発生した。4世紀には、これらの小国家が大和朝廷によって統一され、7世紀には中央集権的な律令国家に発展する。

大陸との交渉が盛んになると、大陸の進んだ文化をもたらし<sup>あすか</sup>て飛鳥文化<sup>はなひら</sup><sup>1</sup>が花開き、また、遣唐使が唐の文化をもたらし<sup>はくほう</sup>て白鳳文化<sup>2</sup>や天平文化<sup>3</sup><sup>てんぴやう</sup>が相次いで栄え<sup>さか</sup>た。だが、政治的な争いが<sup>たびかさ</sup>度重なり、律令制度<sup>い</sup>に行き詰まりが生じたため、延<sup>えん</sup>暦十三年（794年）平安京<sup>みやこ</sup>へ都<sup>みやこ</sup>を移した。



## 二、文学形態と文学理念

まだ文字がなかった時代では、文学は<sup>かた</sup>語り<sup>つ</sup>継がれ歌い継がれていた。このような、文字によらない<sup>でんしやう</sup>伝承<sup>でんしやう</sup>の文学を日本文学史では口<sup>こう</sup>承<sup>しやう</sup>文学という。原始的な社会では、人々は自然<sup>めぐ</sup>の恵みの中で暮らしていた。彼らにとって自然はすなわち神であり、人々は神との交渉——祭りによって自然<sup>いの</sup>の恵みを祈った。

祭りの場<sup>ば</sup>では、共同体<sup>がんぼう</sup>の願望を表す「語り」や共同体の感情を盛り込んだ<sup>かよう</sup>歌謡<sup>かよう</sup>が口に出され、神<sup>こうい</sup>の行為<sup>こうい</sup>が模倣<sup>もほう</sup>的に演じられた。ここに文学や<sup>えんげき</sup>演劇<sup>きげん</sup>の起源があると考えられている。

語りとしての神話、伝説、説話、祝詞、そして共同体の喜びや悲

- 1 7世紀前半起こった仏教を中心とする文化、政権の所在地の名をとって飛鳥文化と呼ぶ。
- 2 律令国家の形成期にあたる天武・持統朝を中心とする7世紀後半に起こった、皇族・貴族中心の文化で、年号白雉の別称白鳳にちなんで白鳳文化と呼ぶ。
- 3 8世紀の初めごろから起こった貴族文化、中国の唐だけではなく、インドやペルシアの文化の影響もあり、国際的な性格を持つといわれる。

しみを表す歌謡は、各氏族の専門的な伝承者である語部によって継承されながら少しずつ洗練されていき、やがては文字で記録されることになる。

6世紀の仏教の伝来に先立って、漢字が日本にもたらされると、幾世代にもわたって伝承されていた語りや歌謡が、漢字を用いて記されるようになった。このような形態のものを日本文学史では記載文学という。

中国や朝鮮の文化に深く接するにつれ、歴史意識が次第に喚起され、日本を外国に対する一つの国としてとらえる国家意識がいつそう鮮明になる。これにより『古事記』『日本書紀』『風土記』などが編纂された。

食糧生産の技術の向上で共同体の生活が安定し、漢字が自由に使いこなせるようになると、集団の文学に取って代わって個人の文学意識が自覚されるようになり、漢詩文では『懐風藻』が、和歌では現存する最古の歌集である『万葉集』が編纂された。

上代の文学には、自然の恵みを祈る人々の気持ちや喜び、悲しみの気持ちを、率直に表現するという特徴がある。これを「まこと」の文学と称している。端的に言えば、「明き清き直き誠の心」であると言える。





## 第二節

# 日本文学の発生と成立

### 一、口承文学から記載文学へ

人々が狩猟・漁労・採集によって生活していた原始の時代も、稲作中心の農耕生活に入った弥生時代<sup>1</sup>以後も、豊かな収穫は神の恵みによると考えられていた。いわば自然と人間との未分化な関係が、長い間続いたのである。人々は自然の恵みを受けるために神々と交渉し、自然を魔術的に克服しようとした。それが祭りである。祭りの場では、神の事績や共同体の由来・地名の由来などが語られ、その「語りごと」は、経験豊かな村落の老人や氏族の語部<sup>2</sup>などにより記憶され継承された。

ところで、「語りごと」は実際には、古代日本人の創造力により生まれたものであり、時代の移り変わりとともに、人々の解釈が加えられて表現も変化していった。神への語りかけにおけるこうした創造力や表現力を、日本の文学の誕生として位置づけることができ

- 1 2000年ほど前に日本にあった古代文化の様式。水稻を作り、金属を使い、やや薄手の土器を焼いた。
- 2 宮廷や地方の豪族に隷属し、始祖に関連した神話・伝説などの詞章を代々伝え、口誦することを職掌とする世襲集団。

る。5、6世紀ごろ、中国大陸から漢字がもたらされると、<sup>でんしやう</sup>伝承されてきた「語りごと」は、徐々に漢字を用いて<sup>きさい</sup>記載されるようになる。また、中国などの外国との交流が盛んになるにつれて統一国家が形成されると、口承文学は<sup>しやうたいせい</sup>集大成して記載された。それが、『古事記』『日本書紀』『風土記』などである。これらに<sup>けいさい</sup>掲載されている話の内容は、神話、伝説、説話の三つに分類することができる。神話は<sup>かみがみ</sup>神々に関するさまざまな物語である。伝説は共同体の英雄や祖先の<sup>かつやく</sup>活躍などを物語にしたものである。説話は人々の<sup>しやうい</sup>周囲におこった<sup>きやうみぶか</sup>興味深い出来事などをまとめたものである。

## 『古事記』

『古事記』は現存する日本最古の<sup>さいこ</sup>書物である。編者は<sup>おののやすま</sup>太安万侶<sup>わどう</sup>、成立は和銅五年（712年）。内容は上・中・下の3巻から成る。上巻には<sup>じやうかん</sup>天地創造に始まる神話が収まれ、物語性、文学性にと<sup>げかん</sup>富む。中・下巻は、<sup>てんのういちだい</sup>天皇一代ごとの<sup>けいふ</sup>系譜を中心として、皇族や英雄の伝説が述べられている。『古事記』編纂の最大の目的は、<sup>しよしぞく</sup>諸氏族の持つ<sup>でんしやう</sup>伝承を統一し、天皇支配の正当性を示して天皇を中心とした国家統一をすすめることにあつ



- 1 (?~723年)、官吏、博学。『日本書紀』の編修にも加わったといわれる。1979年、奈良県から墓誌が発見された。